

「優しさ」を支える「心の強さ」

－ 現代日本の幼児教育と木下式音感教育法 －

土 田 定 克*

“Strength of Mind” That Supports “Affection”

－ Early Childhood Education in Modern Japan and Kinoshita Method for Training Pitch －

Sadakatsu Tsuchida

現代日本の幼児教育の問題点、即ち「基礎の欠如」、「子どもの主体性と自由への偏重」、「善指導の消極性」は偏った自由保育の特徴であり、子どもの「全一的」成長を生活面と精神面において分裂させている。社会問題にも繋がるこれらの現状改善を図るなら、個々の発想に頼るだけでなくサリバソ女史や木下式音感教育法のように、教育の原点たる「躰」や「聴従」について伝統的教育法から学び直す必要がなかろうか。心の病の原因を探り、発病以前に予防する幼児の情操教育とは「愛」の表裏たる「優しさ」とそれを支える「強さ」を育むことであり、そのためには「悪への防御」としての積極的な「善指導」が不可欠である。

キーワード 歌と打つ 心の筋肉 ストライクゾーン 全一的 客体性

はじめに

昨年度、S市H幼稚園において園児達の清涼な歌声に出会った。明瞭な発音と気迫、正確な音程と拍感、それは前代未聞の歌声で、子ども達から至って良質な力が放たれていた。凛とした隊列、一人一人の真剣な眼、まだ小さな体が大きく口を開けて力いっぱい歌う姿。その歌声を冒頭に紹介したいのだが、紙面には能わぬことをお許し頂きたい。

本学「子ども学科開設」を記念する本稿では、宗教・芸術・教育の観点から命の「力」と「法」を究明し、それを現在に投射して多角的に考察する。命や音楽の筆舌し難い幽玄を言語化するのには不可能だが、その一方で、子ども達が歌う意義がある以上、音楽家兼教育者は「幼児教育と歌」の本質を追究して述べ伝える義務を負う。そのためIV章では一例として「木下式音感教育法」を提示し、「優しさ」を支える「心の強さ」を考究する。

I 源泉の探求

1) 「歌」と「^{うたごころ}詩情」

古代において歌は神への祈りであった。「歌う」は「うったう」（訴う）から派生したと言わ

2010年9月15日受理

* 尚綱学院大学 講師

れる。「歌」は字源上、「可」を要素とする字である。人が神に祈るとき、もとより神に哀訴するのであるが、神を「呵^か」してその祈るところの許可を強訴する感情表現が古代の「歌」であったと推測される¹。また、白露語間の音源の相関性として「**utau**」(歌う)が「**В+ЫТЬ**」(吠える・号泣する)を介して「**петь**」(歌う)に繋がる点や²、その「**ВЫТЬ**」(吠える>露)が「**аѡω**」(叫ぶ>希)や「**owl**」(ふくろう>英)の発音に近い指摘³などを見ると、自ずと言語同一源泉説、即ちバベルの塔の瓦解以前に人類が単一言語であった時代が彷彿とさせられる。「うた」(uta)は、絞られた気持ち(u)が発出して向こう側にぶつかり(t)広がる(a)音仕組みで、音源上でも意味上でも、最底辺に「拍」を持つ「うたう」(**utau**)はまた「うつ」(**utsu**)にも近い。「**utsu**」(打つ)は「**бить**」(打つ>露) = 「beat」(叩く・拍>英)に類似する。即ち「歌」による「訴」えは天の門扉を「打つ」祈りであろうか。迫真の「歌」を聴いて心を「打たれた」と言う。確かに「歌」には「討つ」力もあり、ときにその場の氣を一刀両断する神秘性がある。そして「歌う」に近い「打つ」とは、そもそも命の根源的な働きである。「命」の漢字を部首で追うと、「天」の下の「一」(はじまり)を「叩く」となる。即ち形而下における命の原動力は打つことの反復(=叩く)であると言える。その最最少に叩かれる拍動は、最新科学が物質最小単位として発見したクォークとレプトンの「揺らぎ」のうちにも見出される。森羅万象、生まれては消え、消えてはまた生まれる。その打ち続ける命の姿をここに見る。目を閉じれば脈打つ鼓動、星夜の潮騒、そして安らう赤子の呼吸に、太古から打ち続ける命の「うた」(うつ)が聞こえている。そのように命の根源と共鳴する「歌」は人にとって深い精神活動である。歌によって心晴れた記憶はなかるうか。たとえ歌が不得手でも聴こえる歌が心を打つとき、打たれたあなたが反響する。そして心の歌が進る。「人生は歌だ」と悟るとき、全てを讚美する「詩情」が湧く。詩情は軽やかに飛翔して、風を切ってあの青空を吹き抜ける。

2) 「幼児」と「保育者」

幼児が園庭で遊ぶ中にも無限の「うた」が起こり得る。遊びの中で、例えば土や水であれば触覚から何を感じ取るように促すのか。または植物や昆虫の不可思議を共に感じて科学的好奇心に種を蒔くのか。或いはそんなことは端から問題としないのか。いずれの場合もそれは偏に大人側の保育観に左右されるため、幼児教育では保育観の基なる人生観、つまり保育者の中にもどのような「詩情」が息吹いているかが根本的な問題だと考えられる。

園庭遊びと同様、聴覚を介した幼児の活動に「歌」がある。歌は音楽の要であるから音に対する感覚、即ち「音感」は欠かせない。さて今度は歌をどう指導しようか。種々様々な保育観があると思うが、本稿では特に「木下式音感教育法」(以下、木下式)を検証する。だがその前に、なぜ諸々の幅広い幼児教育の探求が「木下式」に行き着いたのか、その背景を述べないことには本件を取り上げた理由が不可解である。そのため次章においては日本保育事情の現状に踏み込んで、その中から話を展開していきたい。

II 現代日本の幼児教育における問題点

1) 基礎の欠如

一般に「芸術」や「表現」と言うと、「美と自由」の世界を想像されるようである。だが「表現」が常に美と自由で終始すると考えるのなら、それは至って皮相な見方であろう。何事

も基礎があって、はじめて美しい自由や善なる自由、真の自由が表れるのである。表現に限らず「基礎を学ぶ」ということは、教える側にも教わる側にも重労働並みの労力を要する。だからそんなものは幼児教育には不要だとするのも一つの保育観であり、一つの人生観である。

ところで人生とは何か。人生はいつから始まるか。普通には誕生後の一日一日、一分一秒の積み重ねが人生である。まことに人生は、塵が積もって山となる。それは一音一音の繋がりが歌を紡ぎ出すのに似ている。可能性豊かな幼児期は人生の歌の始まりであり、人生という建物の礎石である。だから「自由保育」といっても「幼児期」の「教育」に携わる以上は、「早期教育」であることに変わりはない。そこのところを我々は十分に認識しているだろうか。ソロヴィヨフは「真理は全一的実在である」と定義付けた⁴。もとよりこの言葉は神を指向し、可変の人間が「全一的」であることは不可能だが、我々は子どもの一生が不協和音に埋没せずに美しい全一的「歌」へと仕上がるように援助すべきではなからうか。現在、幼児と学童を強く区別して満六歳に線が引かれ、幼児には重点的に自由遊びのみを与え、子どもの全一的「幼童期の成長」を分断する教育観がある。まるで六歳の3月31日と4月1日の通常通りの一日の差異が、幼児から学童への突然変異を平然と強制するかのようである。45分間授業への準備もなく人生の基礎も教わらぬ結果、親も子どもも不安を抱いて入学する。そして入学後に「小一プロブレム」などの社会問題が多発する。じっと座ってられない、先生の話の聞けない、勉強する理由が分からない。一言で言うと全く「我慢」ができない。幼児の主体性や甘えを最大限に認める保育観によって園生活が現実離れして浮遊しているのだ。あちこちで見られる「子ども主体」の「子ども天国」を見ていて、まさに子どもの将来を見通して懸念するのは私だけであろうか。ハンナ・アーレントは「教育の危機」の中で警告する。「子供の世界の自立性を選んだために、子供に大人の世界への準備をさせるべき事柄・・・が、放棄されているのである。・・・子供の独立を尊重するという口実の下に、子供は大人の世界から締め出され、人工的に子ども自身の世界・・・に閉じ込められる」⁵。

2) 子どもの主体性と自由への偏重

「子どもの主体性」を尊重するのは時と場合によっては重要である。しかし常時それが保育基準になるのは如何であろうか。我々は子どもに主体性や自由を持たせることの「両義性」を十分に把握しているだろうか。例えば子どもの主体性を重んじて、「さあ、君の好きなように弾いてごらん」とピアノを与えてみたとする。だが現実、これでは一向に弾けるようにはならない。どんなに本人が表現の欲求に溢れても基礎を習わねば「音楽」にならぬ。乳児には抱っこ、幼児には基礎というように発達段階に即した温かい援助がなければ子どもは容易に自立できない。本来、教育の使命は「自立させること」ではなかったか。ましてやピアノなどとは桁違いに厳粛なる人生芸術の初歩（幼児期）において、その基礎指導の必要性を誰が否定しようか。突然「自由」が与えられても、現実はその「自由に操る能力」がまだ備わっていない。

「秩序と美徳のない自由は、自由ではない」とバークは述べた⁶。また、バーリンは自由には、「・・・からの自由」としての「消極的ネガティブ」なものと、「・・・への自由」としての「積極的ポジティブ」なものがあると分類した⁷。最近消極的自由が推奨されるが、そもそも自由とは神が人間に与えた最大の賜物であり、向上する積極的自由にこそ「自由の真価」がある。試みに二つの指導法を見てみよう。第一は「ボールを自由に投げましょう」とする。これが消極的な自由で「枠

や「型」が定められていない分、楽にボール投げを楽しめる。勿論そういう楽しみ方も幼児期にはとても大切である。しかし常時そればかりでは飽きが出る。緊張と弛緩、雨と晴れ、冬と夏という自然界のリズムに合わせずに、ただ「漫然」と楽しめば意識が「散漫」し、気付けば「怠慢」に襲われる。自らを「打」って気合を入れたり引き締めて何かに「打ち」こんだりする「生活の拍動」がなければ、心の筋肉は弛む^{たる}しかない。そしてコントロール（制御力）など身に付かずとも、無理もない。これがいま最も問題の、幼児達の「自己制御力」（我慢）が効かなくなった原因である。そこで第二の方法は「さあ、このストライクゾーンにボールを投げてみよう」と指導する。勿論、最初は枠に入らない。悔しくて涙を流すこともあろう。しかし練習してそのストライクゾーンに投球する統御力さえ身に付けてしまえば、後は君の思うままだ。今度こそ自由に望むところ、或いは然るべき標的に投球してその高い中率を喜ぶが良い。善い基礎は幅広く応用できるから思う存分に活用して、自分にも他人にも喜ばれる人になるが良い・・・さて、上述したどちらの指導法が真に長い眼で見て、その子の自由や主体性を養うために相応しい援助をしたと言えるだろうか。

主体性が与えられれば許される自由や力が増え、その分それらを用いる判断力と社会的責任とが必要になる。それは用途次第で善とも悪ともなり得る大金に似ている。子どもに主体性だけ持たせても使用法を間違えれば時間と能力、即ち「自分自身」を徒に浪費して取り返しつかない損失を蒙ることもなりかねない。そこで幼児の主体性を主張するだけではなく、心開かれた「客体性」をも育むべきではなからうか。客体性とは真・善・美の力を受動し、精神的ストライクゾーンを志向する従順性である。従順性は聴従し周囲との調和を重んじる。主体性がまるで完全な個の如く自己中心的であるのに対して、従順性は全てに感謝すべく改心して平安を目指す。私より公、目上への尊敬、上の命に順ずる謙虚さと全体和を尊ぶ美意識を育むことは、幼児と云えども全一的人格と情操を深めていく上で必要不可欠な品性ではなからうか。

人の心には様々な思いがある。それらは互いに矛盾することも多い。その收拾がつかなくなれば精神分裂である。意志、情、言行動の不一致が起り、全一的自己が破綻する。「人」という字が示す如く、人は向上するとき矛盾なき全一的人格に近づくが、逆に下降するとき散乱した我による自己分裂が始まる。だから幼児にも相応の目標を指し示し、それを志向する力を育む援助が求められる。向上心は、自我ではなく善きに「聴従」する中で育まれる。それが本来の「目に見えない部分の保育」である。キリストが嚴重に戒めた「心の中で犯す罪」が存する以上、心の動きのストライクゾーンは死守しなければならない。「何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある」（箴言4：23）。

西田幾多郎はこう語る。「我々は普通に、意志は自由であると言っている。しかし自由とは如何なることをいうのであろうか。元来我々の欲求は我々に与えられたものであって、自由にこれを生ずることはできない。ただ或与えられた最深の動機に従うて働いたときには、自己が能動であって自由であったと感ぜられるのである。これに反し、かかる動機に反して働いたときは強迫を感ずるのである。これが自由の真意義である」⁸。即ち自由の真意義は「最深の動機」に「従う」ことだとするが、下村湖人もこれに近い。「汝の心の奥底から突き上げる欲求の声を聞け」⁹。ところで聖書では自由・権利よりも従順・義務に比重があるため自由という言葉はあまり見当たらない。が、救世主が真の「自由」がどの様に得られるかを説いているのは上述した論理の典拠となるだろう。「私の言葉にとどまるならば、あなたたちは本当に私の弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」（ヨハネ8：31～32）。も

しも「真理」は「全一的实在」（ソロヴィヨフ）であるならば、上述通り「全一的で在ること」（＝分断なき幼童期・分裂なき精神）こそが、子どもを真に「自由にする」と結論付けられるのである。

端的に言うと、人生初期における主体性への偏重は発達段階に即さず、時期尚早だということである。主体性を駆使する自己統御力が未発達で、「最深の動機」を聴く力も未熟な上、直感や判断力が拠って立つ基盤（人生経験と智慧）が未修得だからである。即ち無批判に主体性を肯定された幼児がすぐ分かる軸に捕われ欲のままに行動し、真偽・善悪・美醜の交錯を判別できずに自己欺瞞に陥っても気付かず、その状態が習慣付いて当然となることによって健全な人格の成長に支障をきたす恐れがある。如何にして、蜜（善）の中に混ぜられた毒（悪）を幼児が見抜くのか。しかも主体性の主張は宗教的観点から見れば主客顛倒、「主体（創造主）があった上での客体（被造物）」という精神的な背骨を喪失した無神論の感覚である。そこでは見失われた「主」の陽炎を自主性や主体性などの無数に孤立した“主”の中に見出そうとする。だが正教徒であれば我欲や罪を凝視し、我は「主の罪僕」であると痛悔して主体性を主張する余地はない。現世のすべては「神の国（主体）の映し（客体）」と捉えるからである。僕が子に教えるべきは主の御旨に仕える生き方である。完全・崇高・絶対者にのみ統御可能な主体性や主権という大きな「力」を、不完全・可謬性・死を担う人間が把持するのは到底無理な話ではなかろうか。因みに「民主主義」は制度名が思想化した誤訳である。「デモクラシー」には、「主権」（sovereignty）や「主義」（-izm）という意味は無い。正しい訳は「民衆」（demos）の「政治制度」（cracy）だから「民衆政治」である。それは多数決原理の構造ではあっても、決して義の尺度ではない。したがって保育現場でも、第一義の主体性は保育者や幼児などの「人」ではなく、神が無理でもせめて「法」（ルール）に持たせなくては危ない。大人も子どももルールに従う、それが人としてのストライクである。ルールの範囲内であれば自由や主体性も大いに重んじて良からう。しかし範囲外への自由は無法への侵入であり、その虚無は当人を闇の中に宙吊る。幼児にもルールを教え、我慢、思いやりなどの自己感情の投球法を指導する。叱るべき時には叱られて、初めて子どもは自由の許容範囲を学ぶ。我々が真に重んじ守るべきは全一的な「子ども」であって、決して「子どもの主体性」や「子ども目線」などの「子どもの一部分」ではない。主体性への偏重は子どもに絶対性（常に正しい）を唆し、単に我儘を助長する。主体性も客体性も幼児の全体像という実体の側面として捉え、バランスよく子どもの成長を支援することこそ「先に生まれた者」（先生）の責務ではなかろうか。

3) 善指導の消極性

現在も「善悪の判断」を指導する必要性は、現場において重視されている。しかし実態は善というストライクを志向する積極性に乏しく、子どもの悪態を注意するのみといった、悪への傾きを阻止する程度の消極的で傍観的なものに過ぎない。しかも「叱る」はおろか、「注意することすらも放棄する度合いは如何なものであろうか。今年度S市の公立保育園において、実習日誌の講評欄に以下の記述があった。『「注意する』は保育士に相応しい言葉ではありません。私達は『子どもの安全に留意して見守る』と言った方がよいでしょう』。そこまで、子どもの主体性を重んじて安全か。悪を戒め、善に導くという重大な教育責務が等閑にされている。我々は善悪の差異について改めて省みる必要がなかろうか。

聖書と聖伝によると、神はこの世をお創りになり、ご自分で創られた世をご覧になって全て

「善し」と祝福された。この世は「善」によって「善」のために創られ、究極的には「善」のみしか「実在」しない。ところが神以外の全ての頂点に創られた一等天使が自分の支配の唯一及ばない創造主に対して嫉妬し、神に傲慢な戦いを挑んだことからこの世に悪という「現象」が生じて今もその戦いが続いている。その様に悪は実体ではなく、所詮「善の毀損」「善の欠如」でしかない。だから幼児の実体（本来の姿）を守り育むために、幼児が毀損・欠如しないよう、善を志向し堅持していく精神指導が求められるのである。

古来、日本人の美德であった「勤勉さ」や「思いやり」は我が国独特の精神文化であり、それが人間精神の真・善・美の形でなくて何であろう。「勤勉さ」は露語で「Трудолюбие トウルダリュューピエ」（労愛）と言ひ、文字通り「労への愛」である。幼児期から鍛えた勤勉さが、やがて「勤労さ」に繋がる。嫌でも我慢してできるようになる、その試練を耐え忍ぶ気持ちを育むのが善指導の基本である。懸命な克己の闘いは自他に対する正直さを培ひ、偽りなき隣人愛の土台を作る。だが大した課題も与えられず、いつも締めりなく笑って自分自身を持って余し、他者との争奪戦に忘我している幼児を何と多く見かけることか。いつまでも乳児ではないのだから、幼児は遊び以外にも手伝いや行儀などから少しずつ課題に取り組み、徐々に修学への準備をし、自己覚醒を促して思いやりを覚え、「強く」「優しく」生きる道筋を明確に指し示されるべきではなからうか。

便利で平和な世の中では教育のねらいも置換され、指導よりも享楽に傾くものなのであろうか。楽しさも人生の彩りだが、苦しさから逃げ出すのは頂けない。幼児期から世の甘味と苦味を適宜に知覚させない教育は、やがて世の「苦味」に打たれ弱い成人を大量生産し、今年度65万人規模の「引きこもり」を国中に生じさせた一因とは言えないか。「やりたいことならできます」では、受け入れてくれる環境など殆ど無い。やりたいことを実現するには莫大な準備が必要であり、その準備が万端でも先行き分からぬ人の世ならば、準備不足で社会人になる不安感は如何程か。「アリとキリギリス」の話のように、努力を教わる幼児達は着実に努力を積み重ねていく。幼児期だからと享楽していれば因果応報、後でその分の苦勞を負う。どのみち苦勞なき人生など有り得ないのなら、幼児期には遊びの他に相応しい勞も負って「生きる力」を育む方が本人のためではなからうか。孔子も曰く、「之を愛しては能く勞すること勿からんや。焉に忠にしては能く誨ること勿からんや。（子曰愛之、能勿勞乎。忠焉能勿誨。）」（『論語』憲問、14-8）。誰にでも苦味を扱って「幼児に嫌われたくない」という深層心理はあるが、そういう自分本位の理由で職務を怠れば、そのツケは必ず回ってくる。例えば環境破壊により青空が消え、いずれ黄砂一面の空になると予測されている国がある。我が国の肥大した負債も同じだが、先代の利己や誤判断が後代の負荷となる。神は全てをお与えになったが、我々に「自由にやれ」とは仰らない。使徒パウロは説く。「凡の物我に許されたり、然れども凡の物益あるには非ず。凡の物我に許されたり、然れども凡の物徳を建つるには非ず。人皆己の益を求むる勿れ、乃各他人の益を求めよ」（コリントー10：23～24）。もし我々が「今が良ければそれでいい」という無責任な幼児教育をするのなら、後々そのツケを背負うのは今日の前にいるその子である。自分達の「今」ではなく、子々孫々の「未来の益」のための幼児教育を考えるべきであろう。

Ⅲ 心の習慣と予防教育

1) 近隣保育園・幼稚園・施設の事例

近年、予防医学が進歩し、三大死因に至る主因が「生活習慣」で育まれたその人の「傾向」（嗜好性や運動量）に多く由来する事実は今や常識となった。そこで教育学においても予防医学の着眼点を見習って、心の病の原因を取り除く予防教育に着手すべきではなかろうか。我慢できない、やる気が湧かない、後はどうでも良いという情操上の問題も多くは生活習慣に起因する。テレビ依存、ゲーム依存などの「楽しくて、楽なもの」に流されて改心しない「傾向」は人生の意味と目的を曖昧にし、自己愛と怠慢を招いて気力の源を削ぎ落とす。それは我慢が効かなくなる点だけを取って見ても「香ばしくて、美味しいもの」への嗜好から発病する体と「病への過程」が酷似する。情操上、楽しさのみを追求する保育が危惧される所以である。世界トップ水準の自殺者数（13年連続3万人超）、この事実の背後にわが国民の精神状態が一瞥される。予備軍はどの位になるのだろうか。これから先は「心の生活習慣」の観点によって再考された「予防教育」が急務ではなかろうか。

自由保育の園にも見られる近年の変化は、以上の問題が共通認識となった証であろうか。S市Y幼稚園では「卒園までに自転車補助輪なしでこぐ」という教育目標を掲げ、日々、園児達が自転車コースを一所懸命走り回って練習している。ご褒美シールなどを用いて挑戦意欲を高め、毎卒園児全員が目標を達成している。急な斜面でも一輪車に乗るほど旺盛な意欲である。Y園に20年以上勤め、現在同園長の先生は「子ども達に無限の力があるということ、保育の中で、子ども達から教わったんです」と語る。頑張る力を育むY園の園児達には「何事もやればできるんだ」という信念があり、色々なことに挑戦する様子が生活の中で見受けられる。またS市M幼稚園のようなシュタイナー教育を取り入れている所では、同じ自由保育でも宗教教育を中心に据え、人工物を排し天然製のものを多用して「絵本の読み聞かせ」「祈り」「静けさ」を重んじた保育を心掛けている。自由保育に警鐘を鳴らすH市H保育園では躰や「ルールを守ること」をきちんと教え、園児達の作詞に教諭が作曲して皆で共に歌っている。年毎に「海」「山」「空」などのテーマを設けて大自然に触れ合う機会を園児に提供し、静と動のバランス良き保育を目指している。

保育内容の改善努力は万が一至らぬ点があったとしても、その誠意は必ず園児達にも伝わり必ずや良い影響をもたらすであろう。しかし「自由保育」の名の下、大人からの働きかけが極めて乏しい保育が見受けられる。いま最も懸念されるのは、子どもが園に行って特に「何もしない」で帰ってきて、家でも「何もしない」でテレビばかり見ているような場合である（ちなみに日本の子どもは世界一のテレビ漬けである¹⁰）。家庭・学校生活に躓いた少年少女の生活指導にあたるM県児童自立支援施設の職員はこう語る。「育て直しです。返事や挨拶もそうですが、食事マナー、対人マナー……。身につけていないことがほとんどですので、理解させることが大変です。幼少期からの習慣付けが大切なんですね」。勿論、児童非行には様々な要因があるので一概に言うことはできないが、「鉄は熱いうちに打て」と言うように幼児期からの教育が生活習慣に及ぼす影響は計り知れない。内容如何によって、それは病原教育とも予防教育とも成り得るであろう。そこで我々は予防教育を念頭に置いて、今後の保育で留意すべき点を次節以降で具体的に考えたい。

2) 伝統的教育法の事例

自由保育の理想は首肯するとして、ではその実現のためにはどうするか。もし予防教育を視野に入れるのなら、何事も予防には「制限」が付き物である。即ち幼児教育の場合、それは「躰」(枠)と「聴従」(底辺)ではなかろうか。その上で初めて、有り得る理想の境地として自由や主体性などが考えられよう。正教会では聖師父の膨大な精神的遺産を継承して、幼児教育の基本を「主への畏怖」と位置付ける¹¹(詩篇111:10、箴言1:7・9:10参照)。これ以上になく堅固な枠である。また底辺として徳の基盤たる謙遜を学ぶため、「聴従」を通して「我意を断て」と諭す(ペトロ2:13~5:7、テトス3参照)¹²。やりたいことをやるのは楽(弱さ)である。我意を断ち聴従することこそ強さである。自我の発達する時期こそ「自分に厳しく、他人に優しく」を学び、我慢と思いやりを覚え始める最適期である。自我の暴走に悩んでからの軌道修正は倍の苦痛を伴うため、子どものためには酷である。ルールや道理、両親や先生、命ずる良心の声に聴従する習慣を身に付けることは、その子の人生を光に導くことではなかろうか。この点に関して、かの有名なヘレン・ケラーを育てたサリバン女史の記録を拝見しよう。

ヘレンに初めて出会ったサリバン女史は当時21歳、若い女教師はどう着手したか。ヘレンへの憐憫からその主体性を重んじて教育したか。盲聾啞という三重もの不自由ある子どもに多くの「自由」が許されても当然であろう。だがもしその教育法が選ばれていたなら、ヘレンは全く別な人生を歩んだ。我儘な暴君になっていた6歳のヘレンにサリバン女史が断行したことは、以下の通りである。「彼女の気質をそこなわずに、どうやって彼女を訓練し、しつけるかがこれから解決すべき最大の課題です。わたしはまずゆっくりやりはじめて、彼女の愛をかちとろうと考えています。力だけで彼女を征服しようとはしないつもりです。でも、最初から正しい意味での従順さは要求するでしょう。(1887年3月6日)。「私が教えることができる本質的なこと、すなわち、服従と愛とを彼女(ヘレン)が学ぶまでには、この小さな女性と今日のような取っ組み合いを何回もやることでしょう。(月曜の午後)。「考えれば考えるほど、服従こそが、知識ばかりか、愛さえもがこの子の心に入っていく門戸であると確信するようになりました(3月11日)。「この小さな野生児は服従という最初の教訓を学び、そして拘束が楽なものだと気づきました。(3月20日)。「私は何でもヘレンの思い通りにさせておくことが、まったく彼女のためにならないことをおふたり(両親)にわかっていたために全力を尽くしました。また、すべてがじぶんの思うままになるはずがないことを子どもに教える過程は、子どもにとってもまた教師にとっても苦しいものになりがちだということを指摘しました。(3月28日)」¹³。

雇い主たる保護者との関係も含めて、我儘を正す躰に伴う「苦味」を恐れぬ愛がある。「拘束が楽なものだ」とも記していることから、自由ほどの重荷もないことを承知している。そしてヘレンの服従が芽生えた暁にこう記す。「今後、ヘレンにひどく手をやくことはないと思います。前進していく道筋での最大の障害は打ち破られました。(3月28日)」。この間、初対面から僅か三週間。見事に最大の障害が取り除かれている。築かれた師弟関係の上でどんなに自由が許されても、ヘレンは最初に習った服従と愛という「法の主体性」を決して忘れなかった。躰と従順が子どもを放縦から救う「教育の原点」がここにある。百年前の手記から学べる温故知新である。幼児の横行には「枠」(躰)を、その下行には「底辺」(聴従)を設けて精神力の拡散を予防し、自然と子どもの無限のエネルギーが上行に向かって「愛」(ストライクゾーン)を志向できるように導いている。もしそのような導きも向上援助も由としない教育があるとし

土田：「優しさ」を支える「心の強さ」

たら、それは「教育放棄」とどこに相違があるだろうか。自己愛に浸る心の習慣病を予防する意味でも、子どもの善性を過信したり、何かに期待したりしつつ保育するのではなく、現実に即した然るべき保育が求められている。

さて本稿の総括である次章では、現在、サリバソ女史と同じ理念で幼児教育に携わっている木下氏とその教育法について詳らかに見ることにしよう。

IV 現代的諸問題に応える「木下式音感教育法」

1) 基礎の充実

木下達也氏は、この35年間、時代に流されず一貫して独自の教育理念を追求されてきた稀有な教育者である。「木下式」の際立った特長は幼児達の躰の良さと集中力だけでなく、教育者達の情熱、その透徹した子ども理解と高度な保育技術である。無論この教育法に対して賛否両論あるかもしれないが、少なくともこの教育法が本稿で列挙した諸問題を全てクリアしている点に関しては、客観的に見ても高く評価しなくてはならないであろう。

問題点1)「基礎の欠如」に対しては、「木下式」ではまず歌以前に人としての基礎を育む躰に手を抜かない。躰は生活習慣という大事な枠であり、躰がなければ幼児の力の横行によって社会にも多大な迷惑を蒙ることを十分に弁えているからである。躰ができた上で、歌を通して基礎技能を学ぶ。それは自ずと聴従する学ぶ姿勢（底辺）を育み、躰との相乗効果で子どもの「全一的」成長をもたらしている。この教育法はまさに保育園・幼稚園園児への普通教育の一環として考案され、園における実用性にも富んでいる¹⁴。「音感かるた」はかるた取り遊びをする感覚で始められ、読み句も長短・緩急・語調など幼児の心理に沿っているため、幼児は自然と楽しい音楽の世界に惹き込まれる仕組みになっている。先生の語り口が話口調ではなく、豊かな抑揚を伴った音楽の始まりであるのは特徴的だ。また「正しい日本語の発音」に並ならぬ注意を払うので、幼児は自分の鮮明な話し言葉に確信を持つ。発音と発声に注意を向け、同時に心身の細部までコントロールする「自己統御力」が身に付けば、望ましい主体性が自ずと芽生えてくる。音楽による訓練が頭脳と神経回路を養う効果に関しては、澤口俊之などが多くの文献の中で述べているので参考にして頂きたい¹⁵。正しい音程感覚を身に付けるために「ドレミはみんなの仲良しさん」から始まり、「二度音程音階記憶唱」「三度音程音階記憶唱」「半音階記憶唱」へと課題が徐々に複雑化し、ストライクゾーンが少しずつ狭められていく。この地道な練習過程に立ち向かう気力を鍛えることが、やがて幼児の純真できれいな歌声を生み出す基礎となる。この様な基礎訓練を受けた幼児は脳や技能の発達を促されるのみならず、生きる上で最も大事な注意力と我慢、即ち「心の筋肉」が発達する。練習は技よりも気持ちがなければできないので、人生で最も難しい克己の戦術を覚えて学童期を迎える準備になる。芸道の奥義である「反復で分かる理」とか「習慣で見える心」とか「血と汗と涙で学ぶ法則」などは即ち、「白は白、黒は黒」という「絶対性の啓示」と、その光によって認識される「自分の限界」（謙虚の始まり）である。それは真偽・善悪・美醜の差異への直観力も養う。これが、「身体の法」に絶対服従を要する実技道で体得されうる突出した特長である。この教育法では教諭も幼児も多大な努力を求められるが、それを共に担う「共同作業」はやがて清らかな天使の歌声となり、詩情と感動とを与える「美と自由の表現」に結実する。共同作業を通して一番力になっているのは、それを乗り越えた子ども達自身である。音感指導を受ける園児達はその「打ちこ

んだ」頑張りへの報いとして、美しく自由に歌えるという喜びや達成感のみならず、自由遊びの時ににおいてもより一層の開放感と楽しさを満喫するに違いない。

「読み書き」と「聞き語り」を交互に交差させるロシアの教育は、「読んだ」（視覚受動）ものを「語り」（聴覚能動）、「聞いた」（聴覚受動）ものを「書く」（視覚能動）という優れた教育法を持つ。この点「木下式」においても「書けるものは読める」の原理に沿い、幼児達は「歌う」だけでなく聴き取った音を「書く」ことを学ぶ。楽典の難関、聴音課題である。ここでも一般幼児のために工夫された「カラー五線紙」を用い、先述した「音感かるた」との色彩連関によって新内容が既習内容を踏まえて飲み込めるように配慮されている。よく巷にある「色音符」では指導上問題があることを発見した木下氏は、音符ではなく音高不変な「五線」を色別することにより、幼児が誤記によって戸惑うことなく音高感覚を獲得する方法を編み出したのである¹⁴。

この熱心な教育に応えた結果として「木下式」を受けた幼児は音感能力が著しく向上し、中には絶対音感が付く子もいる。音感が付けば音楽は身近になり、その内容は素早く理解される。絶対音感が付けば音楽は母語のようになり、自分の中に絶対的な基準が芽生える。どんなに激しい音の洪水の中でも自分の望む音高を発することができるということは、取りも直さず周囲の誘惑に伸縮されない絶対基準を内包し、その望むべきテンションや調和美を志向する主体性（自由）を保持することである。更に音感訓練の過程において耳を澄ました「生活習慣」が鋭い聴覚を養い、音楽、会話、その他のイントネーションに顕れる様々な機微を見抜く力を培う。「一音入魂」で修得したその聴力は、やがて「内なる声」（最深の動機）や「内なる詩」（詩情）を聴き取る力となり、「一音」に入魂したその集中力は他の「一〇」にも通用し、「一生入魂」へと発展してその生き方にも影響を及ぼすのである。

2) 子どもの全体性への洞察

「木下式」が他の早期教育や英才教育と一線を画す点は、子どもの情操面への限らない重視である。ここでは「人と人との教育が根本である」という信念が日本の伝統を受け継ぎながら温かく守られ、先述した問題点2)「子どもの主体性と自由への偏重」において欠陥した「子どもの全体性」（主客一如）への鋭い洞察眼がある。

「眼は？」「先生の、眼を見る！」。「手は？」「おひざの上！」。「足は？」「バタバタしては、いけません！」。「それから、一番、大事な事は？」「歌を歌わないお友達は、かるたを取ってはいけません！」という園児達との決まり文句のやり取りの中に、大人も子どもも真剣勝負が約束され、ルールへの服従が厳しく鍛錬されている。その語呂の良い掛け声は爽やかな拍感に満ちている。ONとOFFの切り替え、即ち人が何かに取り組むときには心を入れ替えて集中するという姿勢は、幼児期から習わらないと身に付きにくい心技体の一致である。「人智を尽くして天命を待て」というように努力を惜しまず立ち向かう強さ、それは殊にゆとり教育以後忘れがちであった全体性を捉えた情操教育である。幼児期に身に付けるべき情操の基礎、それは「優しさ」とそれを守る「強さ」でなくて何であろう。「優しさ」は不変の定評があるが「強さ」についてはあまり語られない。しかしその実、「優しさ」と「強さ」は不即不離であり、「愛」の表裏である。「イススこれにいえり、爾心なんぢこころを盡し、靈たましひを盡し、意おもひを盡して、主爾しゅなんぢの神かみを愛せよ、此れ誠こゝろの第一だいにして大なる者なり。第二は是これに同じき者、即爾おなの鄰ものを愛すること己おのれの如くせよ」（マタイ 22：37～39）。真実の愛とは、身も心も尽くしきる精神力である。

その高貴な精神は次の言葉に集約される。「人其友の爲に生命を捐つるは、愛此より大なるはなし」（ヨハネ 15:13）。また詩情も、此より大なるはなし。これが愛の美しさ、荘厳さである。サリバン女史の本は問う、「あなたは、これほど厳しく子どもを愛せるか？」と。愛の技である教育は「如何に善き状態へ、如何に善く導くか」、その過程におけるあらゆる均衡感覚が非常に高水準に求められる芸術なのである。

一般的な「子どもの歌の活動」では、先生の伴奏に幼児達が各自気ままに歌っているが、「木下式」ではそうではない。子どもが真に歌う姿、確信を持って歌う姿、能動的で積極的な子どもの姿の中に、鍛えられ、充分に受動すべき時に受動できたからこそ培った真の主体性が輝いている。そもそも人の能動性とは何であろうか。人は能動性のみでは生きられない。むしろ人は多分に受動性によって成長していくのである。他者であれ、自然であれ、芸術作品であれ、人は未知なるものの素晴らしさに出会った時、初めてそれを慕い求めるようになる。したがって人は自分の知らないものを「愛する」ことはできない。即ち、無知では能動することができないのである。まず「知る」という契機がないことには、自分が何を好きで、何を求めている、何を選び取りたいと思っているかも未分明のままである。そのため受動する吸収力に比例して、能動力が付与される。谷隆一郎は「(神への) 受動性の極みにおいて、人は最も善く意志し、かつ真に能動的に行為しうるのであろう」と語る¹⁹。技を秘伝されれば練習が面白く、理解力が付けば学ぶことが楽しい。規範に服従するには誰しも一時的な抵抗を覚えるが、そこで負けたら後が無い。そこが「自我」の克服という、破らなければならない「殻」である。サリバン女史が最初に掲げた目標がこれであった（上記「1887年3月6日」参照）¹³。経験豊饒な目上の指示に従うことによって自分の限界が突破され、怯懦から踏み出せなかった「より大きな一歩」が具現化する。幼児の主体性を尊重するとき、ただ主体性を重んじて主体性は育たない。むしろまず幼児が多くの善きものに触れ、学び、受け入れる客体性を持ち、その土台の上で自分に合った道を主体的に選択できるように促すべきである。真の主体性は客体性の中で涵養され、客体性で育まれた主体性は「主客一如」の塊となって「全一的人格」へと向上する。幼児教育に炯眼を持つ「木下式」においても、まず受動性で習ったことを「歌う」という能動性に連鎖させて「表現」の両側面から「幼児の感性」を隈なく育てている¹⁷。そういう全うな教育法が幼児の生命力を活性化させ、光沢ある歌声となって響く理由なのであろう。

3) 善指導の積極性

「木下式」では、所謂「うそ」を嫌う。幼児が下手に歌ったときに「上手に歌えました～！」とは言わない。どこがどう良くないのかを説明し、できるようになるまで繰り返す。誠意を持って幼児に接する中に、本当の「人と人」の交わりがある。

木下氏の令嬢・木下麻奈講師は平成22年度の夏期講習会において、高い音への跳躍が歌い取れない受講生に対して次の様に指導された。「高いものに対して、自分から向かっていく気持ち！」。歌はここが鍵盤楽器と決定的に異なるのである。高音に飛ぶ時、気合がなければ高い音は取れない。ピアノであれば片手で容易に取れる長6度の音程も、歌うとなったらそうはいかない。高いハードルを飛び越える気力が求められる一大事である。音楽の持つ「高みへ飛翔する力」を、理論ではなくまさに「昇ろう」とする気持ちでもって学ぶ。これは幼児の情操教育上、中核的とも言える部分である。この強い向上心の感覚は、天に心を馳せる信仰心にも繋がるものではなからうか。天と地の垂直感を直截実感に訴える「歌」、その力は折りという「心

の動向」をも示唆するのである。

善指導の地平を見つめるとき、「妥協は許さない」と語る木下氏の言葉は決して威嚇ではない。何も無理な子にまで強情一点張りを決めていく訳ではない。木下氏が「妥協は許さない」と語るとき、その裏に「まさに君自身のために」という優しさが込められている。妥協を許さない教育法、それはアメリカで10数年前から取り入れられた「ゼロ・トレランス方式」にも理念上繋がる。教育の荒廃に憂えた米国は連邦政府指示の下、新しい教育法を国挙げて採用し、それが功を奏して今では学校にまともな授業風景が甦ったそうである¹⁸。善への鍛錬なきところでは必ず悪が力を握る。そのため怠ける、適当に誤魔化すなどの甘えに対して「妥協は許さない」とする木下氏は、「頑張ることを教える」という意味での善指導に余念のない積極性が見られるのである。これは先述した問題点3)「善指導の消極性」との著しい相違であり、善鍛錬によって悪への傾向を能動的に防御しているのだ。

「木下式」では歌の他に身体表現もある。音楽に軽快さと静けさを程よく配分し、観ても聴いても胸に沁みる内容である。子ども達は何を感じるのだろうか。あの4拍目には「上を仰ぐポーズ」があり、幼児達は足の動作を一旦休止したまま両手を頭上で広げる。まるで天に向かって伸び行く幼児の生命力を象徴しているかのような美しい瞬間である。

妥協を許さない積極的な善指導は「最大限の努力」を自他共に求める。そして最大限の努力の最大限の表現は、究極的に「自己犠牲」の一言に収斂される。「^{むぎ}の粒^{つぶ}若^もし^ち地に^おちて^し死^なずば、^{ひとり}獨存^す、若^も死^なば、^{おほ}多^くの^み實^を結^ぶ」(ヨハネ12:24)。真に「学ぶ」ということは、徹底した客体性のうちにあって今この瞬間の己に「死す」ことに他ならない。死を否んで「主体的な学び」などと自己満足しても、それは自分が選ぶものしか選択しないという自己中心的条件を持つ以上、その主体という枠内にその学び自体も制限される。己を脱皮できない種は、芽吹いても「多くの実」を結ぶには至らない。このため柔軟な幼児期にこそ学ぶ姿勢、即ち聴従する客体性を身に付けることは極めて有意義な善指導である。学ぶ姿勢があれば一を聞いて十を知り、学ぶ苦労も喜びも知る。人生初の他人(先生)への関り方が他者への姿勢として身に付くため、幼児が井の中の蛙にならないためにも、幼児期の習い事などはバランスさえ偏らなければ大変意義がある。勿論、不可能なことを無理強いしてはならないが、可能なことであれば本人のために強いなければならないときもあるだろう。即ち本人が自分から怠惰に走るときは戒めなければならない。そういうときに「いや、強制はいけない。本人の意志が大事。本人がやりたくなるまで待とう」と言ったとする。それで捕えられた怠惰の罨から奮起できる幼児がどの位いるだろうか。自分に与えられた可能と不可能とを知悉している幼児がどの位いるだろうか。現実、時の経つほど未解決課題は積載され、放置するほど障壁は高くなり、「打たない「心の力」は行き場なく拡散して消息不明の憂き目に遭う。欲も悪魔も大軍で押し寄せてくるのに初めの一步は重いので、神と天使と大人の援軍が無ければとても踏み出せたものではない。もし全一的な真・善・美への従順性さえ大人も子どもも守るのなら、美しくも厳しい「共同作業」が始まる。子どもの深層心理とは信頼できる大人と共にいたいのである。大人と一緒に、自然でも絵本でも音楽でもいい、何かに同時に関わっていたいのである。「試し行為」などにも見られるように、時には叱られても構わないからとにかく自分に関わって欲しいのだ。厳しくても、強く愛されたいのだ。だから「子どもの自由にさせる」ということは優しさのように見えて、一歩間違えれば子どもの「最深の動機」を鑑みない冷淡な行為になってしまう。「一緒に頑張って生きていこう」、それが真に深く「子どもの心に寄り添う」ことであり、その形

土田：「優しさ」を支える「心の強さ」

としての「大人と子供の協働」^{シネルギア}については今後の研究課題としたい。

おわりに

以上、現代日本の社会問題から幼児教育の問題点を概観し、サリバン女史や「木下式」の中にその予防教育法の例を見出した。特に本稿は心の力と法とを探究したが、その結果探求の道の展望は広がるばかりで論述不十分な感も免れ得ないが、少なくとも「優しさ」と「強さ」が表裏一体を成すことは確認されたのではなかろうか。つまり優しさとは人を思いやる温かい気持ちを指すが、教育者が幼児に接するときにはその表現方法を使い分ける判断力が求められるだろう。「飴」のような甘い優しさが必要なときもあるが、その過剰投与は幼児の精神骨を溶かして忍耐力を萎えさせる。サリバン女史や「木下式」のように適宜「鞭」をも伴う優しさは、むしろ甘さを控えて幼児の精神骨を強め、忍耐力を付けさせて互いに譲り合う精神（優しさ）へと成長を促す。まずは我慢できる「強さ」に支えられなければ、己よりも他を優先する優しさが溢れ出ようか。現実として幼児達もこの世の危険や悪に否応なく囲まれる以上、幼児の体の保護のためには食事指導や交通指導を行うように、幼児の心を保護するためには情操指導や精神指導が不可欠であろう。幼児の心に「心の強さ」という精神力の根が張られてこそ、偽りなき「優しさ」の蓄が身に付くのである。

人生の旅路において、我々は常に可変性に晒されている。今このままの自分でいたいと固執したところで、所詮叶う願いではない。今この瞬間の私は、勝義には次の瞬間においては既にこの世に存在していないのだ。この速さ、この命の動的な姿、可変性を真に観照する時、我々は日頃当然の如く使用してきた「子ども」という言葉のもつ両義性に否応なく突き当たる。つまり、常に動的である存在のすべてを仮に静的なものと措定したときにのみ、「子ども」を「子ども」とその意味だけで認識することが可能となるのである。しかし現実には「子ども」は絶えず「大人」へと成長している。したがって「子ども」とは、勝義には存在しつつ存在しないもの、即ち「子ども＝漸次的大人」という捉え方が正鵠を射た「子ども」理解なのである。であるならば、客体的に「生かされている」この一秒一刻の有り難みを万謝して、今を駆ける風の子に真の道を示さねばならぬ。我々は生き、飛び去り、「我等は我が歳を失ふこと音の如し」(詩篇 90：9)なのだから。人生を歩み始めた幼児達への主の恩寵と降福を心中より祈り、本稿の結びの言葉に代えさせて頂きたい。

参考文献

- 1 白川静『漢字－生い立ちとその背景－』岩波新書 1970
- 2 A. H. Драгункин «ПРОИСХОЖДЕНИЕ ЯПОНСКОГО ЯЗЫКА» Андра Санкт-Петербург 2005
- 3 井桁貞敏『露和辞典』三省堂 1970
- 4 谷寿美『ソロヴィヨフの哲学－ロシアの精神風土をめぐって』理想社 1990
- 5 ハンナ・アーレント 引田隆也 齋藤純一訳『過去と未来の間』みすず書房 1994
- 6 E. バーク 中野好之編訳『政治経済論集』法政大学出版局 平成 12年
- 7 アイザリア・バーリン『自由論』みすず書房 1997
- 8 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫 1950
- 9 下村湖人『青年の思索のために』PHP 出版 2009
- 10 清川輝基・内海裕美『「メディア漬け」で壊れる子どもたち』2009 少年写真新聞社

- 11 Святитель Феофан Затворник «ВОСПИТАНИЕ ДЕТЕЙ Отечник №2 »Сестричество во имя преподобномученицы великой княгине Елизаветы Москва 1997
- 12 Преподобный Иоанн Лествичник «ЛЕСТВИЦА»Издательство Сретенского монастыря
- 13 サリバン 横恭子訳『ヘレン・ケラーはどう教育されたかーサリバン先生の記録ー』明治図書刊 2010
- 14 木下達也『わたしの音感教育』早川書房 2006
- 15 澤口俊之『脳教育 2.0』講談社 2008
- 16 谷隆一郎『人間と宇宙的進化ー証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐってー』知泉書館 2009
- 17 鈴木裕子「幼児の感性を具体化する試み」(『保育学研究』第47巻第2号 2009所収) 日本保育学会
- 18 国米欣明『その子育ては科学的に間違っています』河出書房新社 2010

木下音感協会公式ホームページ <http://www.kinoshita-onkan.com>